在中国居留民団史集成

▼編・解説▲ ゆまに書房編集部

第Ⅰ期 全6巻

ペスト流行時の検疫委員（『斉々哈爾日本居留民会三十年史』より）

辛亥革命、満洲事変、日中戦争等、
多くの政変・戦乱や伝染病、天災、
そして中国人との友好・対立の荒波に生きた
在華居留邦人の詳細な記録。

上海居留民団本部（『上海居留民団三十五周年記念誌』より）

ゆまに書房

在中国居留民団史集成 第Ⅰ期・全6巻

［編・解説］ゆまに書房編集部　●揃定価：本体115,000円＋税 ISBN978-4-8433-6063-7 C3321　2021年7月刊行予定

全6巻の構成　A5判上製／カバー

◆第1巻	上海居留民団三十五周年記念誌　上巻	定価：本体26,000円＋税	ISBN978-4-8433-6064-4
◆第2巻	上海居留民団三十五周年記念誌　中巻	定価：本体15,000円＋税	ISBN978-4-8433-6065-1
◆第3巻	上海居留民団三十五周年記念誌　下巻	定価：本体18,000円＋税	ISBN978-4-8433-6066-8
◆第4巻	南京日本居留民誌	定価：本体16,000円＋税	ISBN978-4-8433-6067-5
◆第5巻	安東居留民団十年史	定価：本体20,000円＋税	ISBN978-4-8433-6068-2
◆第6巻	吉林日本人発展史／斉々哈爾日本居留民会三十年史／解説	定価：本体20,000円＋税	ISBN978-4-8433-6069-9

関連企画のご案内

近代中国都市案内集成 上海編
［編集・解説］孫安石　全12巻
租界に代表される「植民都市」であり、あらゆる人々が同居する「国際都市」上海のガイドブックを収録。戦前日本人の上海イメージの形成とその変容とをたどる。●揃定価：本体277,000円＋税

近代中国都市案内集成 北京・天津編
［編集・解説］吉澤誠一郎　全13巻
北京は辛亥革命以後も都としての風格を保ち、租界のある港町、天津は日本人を魅了した。清末の北京・天津を論じる際に必ず参看される地誌やガイドを網羅集成。●定価：本体283,000円＋税

近代中国都市案内集成 大連編
［編集・解説］松重充浩／木之内誠／孫安石　全18巻
ロシア統治時代から太平洋戦争まで、大連の歴史を示す案内書、報告書、公式資料等19点を収録。多様な視点から大連史を紹介し、日中両研究者による解説を付す。●揃定価：本体318,000円＋税

香港都市案内集成
［編集・解説］濱下武志／李培德　全13巻
日本と香港―中国―英国の多角的な関係、または香港の日本人社会などを理解する上で必携の史料集。基礎的文献をはじめ、現在入手可能な史料を最大限に集成。●揃定価：本体197,000円＋税

近代台湾都市案内集成
［監修・解説］栗原純／鍾淑敏　全20巻
明治～昭和前期の台湾の旅行、地理、民俗等の視点から資料を集成。『台湾鉄道旅行案内』や、定住した日本人が各地域での発展を図った足跡を示す資料等を収録。●揃定価：本体330,000円＋税

日中戦争期「対日協力政権」
［編集・解説］関 智英　全10巻
「漢奸」と呼ばれ、戦後忘れられた人々の理想とは？　それぞれの人々の主体性に寄り添い、歴史観の転換を促す占領下中国に関する資料を集成。　●揃定価：本体190,000円＋税

「満洲国」地方誌集成
［編・解説］ゆまに書房出版部　全17巻
「満洲国」の地域社会を詳細に記した包括的で信頼度の高い資料群。歴史、人口、経済、商慣行、教育、衛生等々、当時の行政機関が作製した省・市資料を集成。　●揃定価：本体313,000円＋税

戦後日中交流年誌
［解説］大澤武司　1945～1972　全17巻
戦後から国交正常化に至る国交のない約28年間の日中間の交流概況と詳細な日中交流年表。重要協定や取決め、声明文など、戦後日中関係史必備の基礎資料集。　●揃定価：本体255,000円＋税

ゆまに書房 YUMANI SHOBOU
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-7-6
TEL .03（5296）0491
FAX.03（5296）0493
http://www.yumani.co.jp/
e-mail eigyou@yumani.co.jp

●特におすすめしたい方●
中国・日本近現代史研究者、植民地史研究者、各大学の図書館、公共図書館など。

ご注文書

ゆまに書房　Tel.03(5296)0491／Fax.03(5296)0493　年　月　日

在中国居留民団史集成　第Ⅰ期・全6巻
揃定価：本体115,000円＋税
ISBN978-4-8433-6063-7 C3321　セット

お名前

ご住所　TEL　（　　）

取扱店

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。

21.06/01.7,000.RS

刊行にあたって

明治三十年代から敗戦までの間、上海、天津、奉天等、中国の諸都市には居住する日本人の自治的団体＝居留民団が存在した。これらの団体は当初、自発的な結社として日本人会、日本人倶楽部等を自称していたが、明治三十八年に、居留民団法が施行されるに伴い、法人格を認められるに至った。居留民団は現地日本人に対し管理する権限を有し、現地における日本人社会の中核を成した。

一部の居留民団は、一定の周年や活動の一区切りを以て、自らの歴史を記録した『年史』、『記念誌』、『発展史』等の公式史を作成し、その宣揚に努めた。本シリーズでは、これらのうち、上海、南京、安東、吉林、チチハルにおける居留民団の公式史を収録する。

これらの資料は、日本人の居住開始の経緯、生計の確立、道路や水道、学校等の公共施設の設立・運営等、現地で生活するための施策に奮闘した歴史を伝えている。また、農作物の不作や大規模な自然災害、伝染病の流行等、多くの困難にも見舞われており、現地の日本人が対応に苦慮した事跡は、現代から視ても興味深いであろう。

本シリーズにおいて最も大きなテーマは、現地中国人社会との関係である。広大な租界を有した上海を別とすれば、中国人社会の中で孤島のように存在していた居留民会にとって、現地中国人との協調・協力は不可欠であった。しかし、居留民会の存在した時代の中国は、政変や革命、戦争が相次いだため、中国人との対立や軋轢も頻繁に発生した。たとえば、国民革命の時期における南京では、日本製品のボイコットや日本人に対する排斥行為が相次ぎ、情勢が不穏になるにつれて一時的な引揚も余儀なくされたことが語られている。

こうした政治的事件は、新聞や外交文書も多く記録している所である。しかし、現地に生きた日本人だからこそ知りえた事実は何だったのだろうか。こうした点に、侵略・被侵略に留まらない日中関係史への視角があるはずである。本シリーズの刊行により、基層レベルにおける研究の深化を期待する。

（ゆまに書房編集部）

……本書の特色と収録内容……

- **上海、南京、安東、吉林、チチハルに存在した日本人の居留民団が、大正～昭和戦前期に発行した公式史を収録。**
- **日本人の居住開始の経緯、現地領事館の活動、公共施設の整備、日本人学校の設立、自然災害や伝染病への対応など、日本人が中国で生活するために行った努力を伝える。**
- **居留民団の所有する文書や在住者からの聴き取りを情報源としており、他の史資料には見られない記述を豊富に含む。**
- **辛亥革命、北伐、満洲事変、日中戦争等、多くの政変・戦乱が発生した時期において、現地中国人との間で発生した摩擦を克明に記録。**
- **居留地における住居、企業、神社、学校等の施設、及び居留民会の中心となった人物等の写真を多数掲載。**

▼第一巻～第三巻▲

［著・発行］上海居留民団……一九四二年

上海居留民団三十五周年記念誌 上・中・下

本書は上海居留民団に関し、最大にして最も基本的な公式史である。「三十五周年」という数字は、太平洋戦争の開戦により、日本側が租界の実権を手中に収めた時期に合わせたことに因む。本書の特徴は、民団の事業の概略を記す他、「重要事項摘録」として明治三十八年から昭和十七年までの極めて詳細な年表を掲載し、上海の日本人社会に関する事細かな事象を確認するのに至便な作りとしている点である。なお原書は全一巻であるが、編集にあたり三分巻とした。

▼第四巻▲

［著］庄司得一［発行］南京居留民団……一九四〇年

南京日本居留民誌

著者は大正十三年以来南京に定住し、現地邦人の歴史を知悉していたことから、昭和十四年に南京版『大陸新報』に連載した「南京居留民誌」を一冊にまとめたのが本書である。本書は明治末年より邦人の経済発展が続く一方で、中国人との軋轢も顕著となり、特に北伐に伴い発生した南京事件（昭和二年）では、現地人の視点で見た被害の状況を記録している点では、極めて貴重な証言を提供する。なお、日中戦争における「南京大虐殺」には言及はない。

▼第五巻▲

［著・発行］安東居留民団法実施十週年記念会……一九一九年

安東居留民団十年史

安東（現在の丹東）は日本向けの木材輸出で栄えた都市であり、日露戦争後の明治三十八年より日本人の居住が始まった。本書は居留民団の成立十周年を記念して編纂されたものであり、その情報源の多くを民団の保存する書類に拠っている。木材産業振興のために道路、橋梁等の建設に努力した事が強調されており、これはインフラ整備に民団が強い力を持った事実を示している。

▼第六巻▲

［著］松本藤太郎［発行］吉林日本商工会議所……一九三六年

吉林日本人発展史

日本人の吉林市在住三十周年を記念して出版されたもの。著者は、現地日本人の発展が、満鉄の拡張とともにあったことを強調しており、本書は企業城下町の歴史として読むことができる。また、情報源としてオーラル・ヒストリーを重視しているのも、他書には見られない特色である。

［著・発行］斉々哈爾日本居留民会……一九三七年

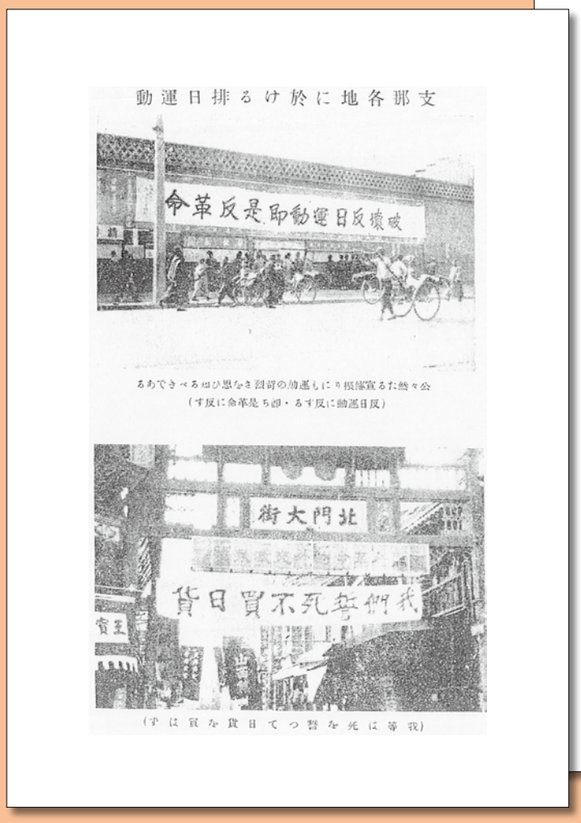
斉々哈爾（チチハル）日本居留民会三十年史

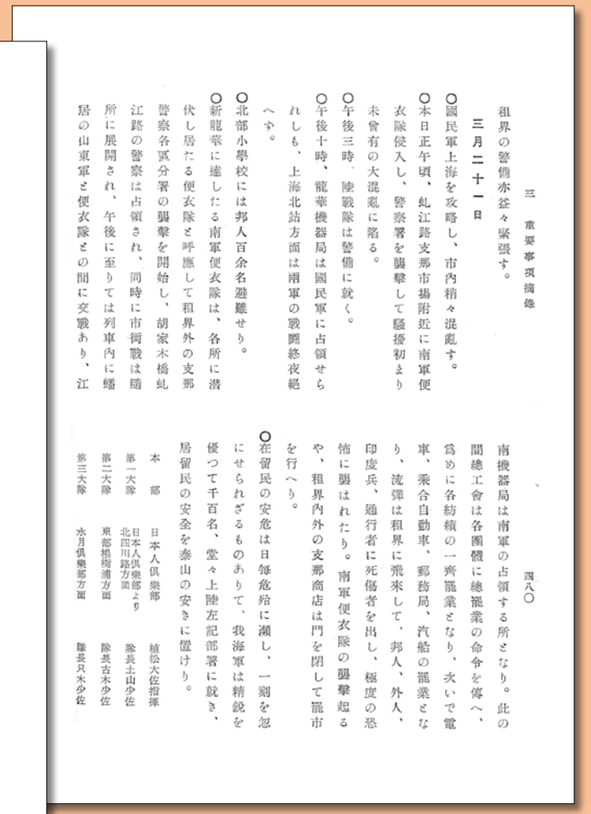
日露戦後より「満洲国」建国までを描く。チチハルは満洲の西北部に位置するため、本書の内容もロシア革命や奉ソ紛争など、中露間で発生した変動に関する記述が多い。また、ペストの流行が猖獗を極めたため、防疫に腐心した歴史は、現代から見ても興味深い。

本文見本

約62%に縮小してあります

▼『南京日本居留民誌』より





三　重要事項摘錄

租界の警備亦益々緊張す。

三月二十一日

○國民軍上海を攻略し、市内稍々混亂す。

○本日正午頃、虬江路支那市場附近に南軍便衣隊侵入し、警察署を襲撃して騒擾初より未曾有の大混亂に陥る。

○午後三時、陸戰隊は警備に就く。

○午後十時、龍華機器局は國民軍に占領せられしも、上海北站方面は兩軍の戰鬪終夜絶へず。

○北部小學校には邦人百余名避難せり。

○新龍華に達したる南軍便衣隊は、各所に潜伏し居たる便衣隊と呼應して租界外の支那警察各區分署の襲撃を開始し、胡家木橋虬江路の警察は占領され、同時に市街戰は隨所に展開され、午後に至りては列車内に蟠居の山東軍と便衣隊との間に交戰あり、江南機器局は南軍の占領する所となり。此の間總工會は各團體に總罷業の命令を傳へ、爲めに各紡績の一齊罷業となり、次いで電車、乘合自動車、郵務局、汽船の罷業となり、流彈は租界に飛來して、邦人、外人、印度兵、通行者に死傷者を出し、極度の恐怖に襲はれたり。南軍便衣隊の襲撃起るや、租界内外の支那商店は門を閉して罷市を行へり。

○在留民の安危は日毎危殆に瀕し、一刻を忽にせられざるものありて、我海軍は精鋭を優つて千百名、堂々上陸左記部署に就き、居留民の安全を泰山の安きに置けり。

本　部	日本人倶樂部
第一大隊	日本人倶樂部より北四川路方面
第二大隊	東部楊梅浦方面
第三大隊	水月倶樂部方面
植松大佐指揮	
陸長土山少佐	
陸長古木少佐	
陸長只木少佐	

四八〇

▲『上海居留民団三十五周年記念誌』より